

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.274
2026.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

—『日本先史土器図譜』と現在—

鈴木 正博

● 第70回 ● 磨消連弧文から解脱する意匠形式

今回は「遠部第5類土器」(残余分類される有文断片群)に接近し、『図譜』[B2式]の「奥行」として解脱する「緩衝系列」に着目し、西根遺蹟第4集集中地点からの安定的出土を確認した。その一方で大森貝塚等に貫入し混入する「緩衝系列」の学史的展開を踏まえるならば、次の関心は「B2式」の常南総北「遠部系列」と武蔵方面「大森2式」に観る「接圏文化」の相互作用へと赴く。

「大森2式」は文献(1980b)が初出で概観と大森貝塚資料の詳細に触れ、続いてさいたま市寿能遺蹟の報告資料により年代別系統別に新たな知見が文献(1986)で披瀝され、「精製土器様式」の総括的な所見にも触れており、共々参照願ひその全貌に接して頂きたい。

ここでは「大森2式」の「磨消連弧文類型」、その中でも「有頸ソロバン玉形」(深)鉢範型(「無頸ソロバン玉形」(深)鉢範型は文献(1998)参照)に接近するが、既に標本とすべき資料は本連載第13回(第16図)・第46回(第49図)に掲載済である。第16図右では大森貝塚特有の「有頸ソロバン玉形」深鉢範型の文様帯を、第49図では異なる三種の「有頸ソロバン玉形」深鉢範型の文様帯(大森貝塚・陸平貝塚・立木貝塚)を示しており、常南総北への新たな展開が射程に入る。

因みに「遠部第5類土器」では「磨消連弧文類型」の先取権問題が鼻筋筋から正規筋へと訂正されている(早坂広人(2025)「研究史加曾利B式(続)」『地域考古学』9号)。また、大森貝塚では破片同定の拙速もあり、文献(1986)での見誤り訂正を再確認するならば、「なお、『考古II』275ページの土器はソロバン玉状の深鉢の胴部であり、稜が縄紋帯の例である。さらに『考古II』278ページの上段もやはりソロバン玉状の深鉢の胴部である。ここに訂正したい。」と公開しており、こうした先行研究に無関心を装い、「該書では、「遠部系列」の中に体部ソロバン玉状鉢形土器とは気づかず「遠部系列」として斜沈線紋が解説される例が少な

くとも二例(関(編)1980.p.275・p.278)あるからである。」(大塚達朗(2019)「縄紋時代後期加曾利B式土器の研究(Ⅲ)―加曾利B2式の理解のために―」『南山大学人類学博物館紀要』第37号)とは何をかいわんや、であろう。加曾利B式研究の面白さは揚げ足取りよりも少々遠回りしてでも山内清男から振り返るに限る。

閑話休題。特定の「類型」には幾つかの「器種範型」があり、その「器種範型」にも幾つかの「文様帯プランチ」が見られ「形式」として区別される。「磨消連弧文類型」の「有頸ソロバン玉形」(深)鉢範型は第16図右の大森貝塚の体下半「横線区画内綾杉状文様帯」を「大森形式」と指標化するならば、学史的な第49図により「大森形式」に加え、陸平貝塚の体下半「斜行充填状文様帯」を「陸平形式」、立木貝塚の体下半「横線充填状文様帯」を「立木形式」と指標化して区別されるが、『図譜』[B2式]の「奥行」である「遠部第5類土器」は「磨消連弧文類型」の断片1点のみが伴存するに止まり、全形が窺える層位的伴存が切望されていた。

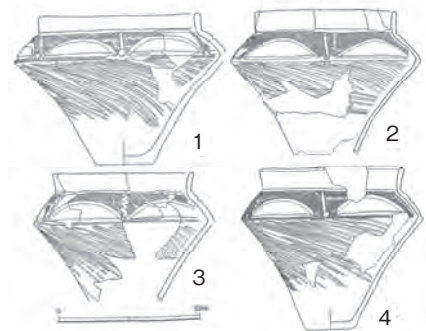
そこで再び「緩衝系列」が安定して出土する西根遺蹟第4集集中地点に接近するならば、「磨消連弧文類型」の「有頸ソロバン玉形」(深)鉢範型も多く見出され、しかも「大森形式」との関係は極めて薄く、常南総北に於ける「陸平形式」と「立木形式」の主体性が窺える。

第81図が第4集集中地点の「陸平形式」である。有頸形態は直立する短頸が纏まり、更に第5集集中地点への変化としては外反する長頸への移行が見られる。ソロバン玉形の屈折凸部は横線のみで「大森形式」に多い刻文帯等は見られない。体部のみの破片も何点が見られ、又直立する短頸部に「吉見台系列」由来の口縁部縄紋帯から変化した帯状縄紋帯が施される「奥行」としての変容例も見る。

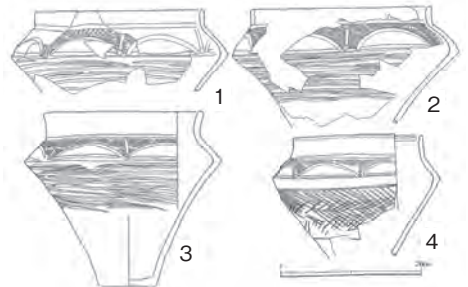
第82図1・2・3が第4集集中地点の「立木形式」である。有頸形態は第81図と同様に直立する短頸が纏まり、ソロバン玉形の屈折凸部も第81

図と同様に横線のみで刻文帯等は省略される。西根遺蹟第4集集中地点は「緩衝系列」の安定と共に、第81図や第82図の通り「大森2式」に由来する「磨消連弧文類型」も目立つ存在である。「緩衝系列」は「大森2式」の文様帯とは積極的に関与しない独立した「奥行」であるが、「陸平形式」と「立木形式」への変容は「大森2式」と『図譜』[B2式]が「接圏文化」として積極的に関与した「奥行」であり、大森貝塚に於ける状況も踏まえれば、「大森形式」からの解脱に他ならず、「遠部第5類土器」の例も同様であろう。

第82図4はこれまでの三種の「形式」とは異なり、体下半「横線区画内羽状斜線交互充填状文様帯」の特徴は、「大森形式」との文様交換(綾杉文⇔羽状斜線文)が髣髴とし、「接圏文化」との交渉に観る「大森形式」からの変容である。初期の変容から解脱への途に至るのであろう。



▲第81図：西根遺蹟第4集集中地点の「陸平形式」



▲第82図：西根遺蹟第4集集中地点の「立木形式」等

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

目次

■加曾利B式土器 磨消連弧文から解脱する意匠形式(第70回) 鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第266回)	宮川真聖 …3
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第21回) 工業善通 …2	■考古学者の書棚 『住田正一蒐集古瓦図録』	河野一也 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第21回)

工楽 善通

1978年に在外研修でヨーロッパに出かけた頃は、ほんとうに忙しかった。奈文研では大学の非常勤講師や、自治体の文化財審議委員など年間を通じて引き受ける役職は2箇所までと所内で取り決めていた。その年、佐原さんが大阪市立大学(現大阪公立大)で、考古学概説の講義を受け持っていたが、他の大学へどうしても行かざるを得なくなり、私に市立大へ変わって行ってくれということで、文学部長である直木孝次郎先生にも既に了解をとっているからと言うことであった。当時私は平城宮跡調査部であったので、発掘現場もあるし大変だと思ながらも、初めての経験で引き受けることにした。市立大では当時まだ2部制で、夜間部の授業があった。私は金曜日の午後3時～4時半と、18時半～20時で、昼間の4時限が終わった後は授業の準備をする為に学内図書館を利用したり、売店で文房具を見定めたりして過ごした。講義にはG.チャイルド著、近藤義郎・木村記子訳『考古学とは何か』岩波書店1969を使うことにした。市大での考古学の授業は隔年で、翌々年も引き受けることになった。2年度目には学生から、かつて大学には教授でおられた角田文衛先生が調査された大分県丹生川出土の古式土師器の発掘品や、茨城県の貝塚資料があることを教えられ、見せてもらった。これらは良い資料だと思い、授業の空き時間などに学生と共に少しずつ整理しようと取りかかった。しかし年度終了となってしまい、途中のままで放棄せざるをえなかった。

この頃佐原さんは大森貝塚とS.モースやH.シーボルト、J.ラボックなどに関心を寄せ調べものをしていて、ラボックについては氏の著“PRE-HISTORIC TIMES”(1865)の出版年による記述変化を探索していたので、私はその本が市大の図書館にないものかとカードを引いたら、何と大阪商科大学(旧名)蔵書印のある第三版があったので、貸出期日いっぱいまで借りて佐原さんに渡した。(この顛末に関しては佐原真「ラボック、トムセン、シーボルト、モンテリウス詣」明治大学考古学研究室編、『論集 日本原史』吉川弘文館 刊 1985年参照)

夜の授業が始まる迄の時間は、また、理学部植物学の粉河昭平先生の所へ行ったり話を伺ったり、建築史の研究室へ行ったりして有効に活用することが出来た。また、時には学生達と近くの呑屋で阪神タイガースのナイターを見ながら一杯を楽しむこともあった。授業が全て終わって帰る頃は大阪市内の古書店の閉店時間前であったが、時折店内で、府や市の知合いの考古学研究者と顔を合わす時があった。翌朝はまた8時半から発掘現場へ立った。

1980年代後半になった頃、私が埋文センター集落遺跡研究室長であった時、京都立命館大学の考古学研究室の和田晴吾教授から、弥生文化と農耕について非常勤講師を勤めてもらえないかという問い合わせがあった。熟慮のうえ引き受けざるを得ないと判断した。ここでもやはり金曜日の4時限の授業にしてもらった。大学は金閣寺近くの衣笠で、JR京都駅からバスで行くのが良いとのことでそうしたが、乗車時間が50分かかりこれが授業の準備するのに役立った。受講は15～20名くらいだったと思うが、卒業後の学生達の進路について、よく知らない。その後、関西の発掘現場で私の講義を聞いたという女性技師に出合った。

1990年頃鳴門教育大学地理学教授の木原克司氏から弥生農耕と水田経営について、集中講義をしてもらえないかと願いがあった。木原氏は以前に大阪市文化財協会で難波宮跡の発掘調査に従事しておられ、条里制の研究をしていた旧知の仲であっ

たし、鳴門教育大学にはかつて日本中世史の脇田晴子教授が在席されていて、私は奈文研埋文センターの研修で度々講師をお願いした経緯があって受けることにした。始めて鳴門大橋を渡って、木原氏に迎えてもらい講師宿舎に入った。集中講義だから月～金曜日で、1日4コマを熟すことになる。半分は各地の水田遺構跡調査のスライド映写と説明で済ませたが、しゃべり続けるのはほんとうにしんどかったが、夕食時は初日に木原氏に案内してもらった寿司店で、海の幸によって英気を養った。

奈文研を出て、大阪の狭山池博だけになった2012年には、沖縄国際大学の文学部上原静教授から考古学の授業で、弥生時代農耕について、1週間の集中講義を夏季休暇中にやって欲しいと頼まれた。同大学では1998年10月に、日本考古学協会の沖縄大会が開かれた時に出席して以来のことで喜んで出かけた。大学に到着して上原氏がまず案内してくれたのは、8年前('04年8月)に米軍ヘリコプターが大学構内へ墜落した現場で、黒焦げになった木がそのまま立っている状況が残されていた。大学は広大な普天間基地のすぐ隣にある。講師専用の宿舎を用意してもらい、休暇中であったので、3食共外食であったのは気楽で良かった。短期間ではあるが、図書館利用カードを作ってもらったことは、沖縄県で刊行された郷土文献などを講義を少し早く切り上げて閲覧するのに大いに役立った。上原氏には、文学部におられるさまざまな分野の先生方を紹介していただき雑談する機会を設けてもらったことは又とない良い経験だった。文学部にはまた江上波夫先生のお嬢さん江上幹幸(ともこ)教授が民俗学の専門でおられるそうだが、今は夏季休暇で東南アジア方面へ調査に出かけておられるとのことだった。授業では各地の発掘現場で写したスライドを写すから、そのような部屋と投影機を用意して欲しいと上原氏に言ったら、もう使わないから、近々廃棄しようと思っていたとコダックの円ドラム式のプロジェクターを用意してもらい助かった。授業は月曜日～土曜日午前中までの16コマで、20名余が出席していて、ほとんどが考古学専攻生であった。この夏休みも、上原氏は学生と共にやんばる方面の発掘調査に出かけていて、数日前に終了して戻ってきたそうで、その学生も何名か私の授業に出ていたらしい。土曜日までの講義はやっと終り、帰路の準備を始めていた前日から天気予報で、超大型台風の沖縄本島への襲来が報じられていた、がそんな中全授業が終わった土曜の午後には上原氏の自動車から乗せてもらい、読谷村の座喜味城や、やちむん(焼物)の里を案内してもらって、那覇のホテルになんとか入った。その夜から台風は本格的な強風となり、翌日は朝からフライトは終日欠航となり予約便もダメとなり、さらに翌日も夕刻まで大阪への便は取れず、空港の床に座り込んで過ごしたことが良い思い出となった。

略歴	
1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 266

安土城跡 ～滋賀県近江八幡市

宮川 真聖

今回はみなさんご存知安土城跡について、「私からみた安土城跡」という観点で、私が興味深いと思った点について紹介します。

安土城跡といえば、天下統一を目指した織田信長が築いた、豪華で堅牢な天主や高石垣からなるお城として有名で、本能寺の変後に焼失したことで、城の構造の詳細が分かっていない「幻の城」としても有名です。城郭研究の面からは、主郭を頂点としたピラミッド型の縄張り構造や、瓦・礎石・石垣の3点セットの導入など、近世城郭へとつながる新たな特徴を持ったお城としても重要とされています。

さて、私の専門は中世の土器や陶磁器なので、今回は土器や陶磁器からみた安土城跡について考えてみようと思います。ただし、今回はその中でも私が実際に参加した発掘調査体験をもとに、私なりに考えたこと、思ったことについて書いてみます。

私が参加した調査は、当時大学院の1年生の頃の2024年に行われました。この調査は、滋賀県の文化財保護課による「幻の安土城」復元プロジェクトと、それに伴う「令和の大調査」事業の一環で行われたもので、安土城跡の真の姿の解明を目的に、令和5年から20年計画で行われています。初年度となる2023年には、主郭から本丸取付台に伸びる石垣の調査が行われ、石垣の原型が残らないほどの徹底した破城が行われていたことが明らかになりました(松田2024)。

2024年の調査では、主郭直下の本丸取付台で発掘が行われました。この年の調査では、まず主要な建物を構成する礎石が複数見つかりました。礎石はとて大きく、また焼失時の炎によって赤く焼けたものもありました。また建物を区画する石列や、取付台にいたる虎口の階段状遺構など、重要な遺構が複数見つかりました(松田2025)。

一方で土器や陶磁器はというと、実はほぼ全くといってよいほど出土しませんでした。「安土城ともなればさぞたくさんの土器や陶磁器が出土して、当時の人々の豊かな生活の様子が伺えるだろう」と想像していたのですが、結果はむしろその逆だったのです。

そこで私の中で、「なぜ安土城跡でこれほど土器が出土しないのだろう」という疑問がわきました。そもそも私の経験上、どんな遺跡であっても、土器や石器といった遺物は多かれ少なかれ必ず出土しました。もちろんその量や質は様々ですが、少なくとも何も出ないという遺跡はなかったのです。しかし、今回の調査ではほとんど何も出土しませんでした。遺構は重要なものが複数見つかったのに、土器や陶磁器がほとんど出ないという興味深い現象が認められたのです。

さて、考古学の世界ではよく「ないことに依る議論は危険である」といわれます。なぜなら、必ずしも「ない」=「本当はない」わけではなく、「まだ見つかっていない」だけの可能性もあるからです。しかし、今回の調査でみられた、土器や陶磁器が出土しない現象は、それ自体になんらかの意味があり、なんらかの人間行動があったことを意味するのではないのでしょうか。そして

それが何かというと、「火事場整理」、すなわち片付けです。一般的な遺跡ではほぼ必ず土器や石器といった生活道具が出土しますが、それはつまり、当時の人々が集落や住居を破棄する際、周辺に捨てたゴミを整理したり片付けたりすることなくそのままの状態にしていたことを意味します。実際にそうした例はかなり多く、当時の人々にとっては割と普通のことだったと考えられます。一方で安土城跡の本丸取付台では土器や陶磁器が全く出土しません。つまり、当時の人々にとっての安土城跡は、城が機能しなくなった後も「きれいにしておこう」「片付けておこう」と思われるような、特別な意識をもたれる場所だったと思われるのです。なぜそのように思われたのかということは、まだ想像の域を出ず、答えは見つかっていません。ただいづれにしても、私はこの点に安土城跡の特徴の一つがあると考えます。つまり、安土城は当時の人々にとって、城の機能がなくなった後も意識される城であったということです。こうした、当時の人々の城の「その後」に対する思いは、天主台石垣の「破城」にもみられるのではないのでしょうか。破城も、城の廃絶後、その廃絶性を見せつけるためにおこなわれたものと考えられ、当時の人々の城の「その後」に対する意識を読み取ることができます。

このように安土城跡では、遺跡ができて営まれ、やがてその役目を終えていく過程における、人間の遺跡に対する意識や行動についてとても興味深い現象を見ることが出来ます。このことが、私にとって安土城跡が「おもしろい」「すごい」と思う遺跡となった理由になります。当時の人々にとっての安土城跡とは単に生活するためだけの場所ではなく、なんらかの象徴的な意味を持った存在であり、城としての機能を失ったあとも人々が意識する存在だったのではないのでしょうか？

さて、ここまで私の専門から、安土城跡のおもしろさや魅力について「土器や陶磁器が出土しない」という現象をもとに思ったことを自由に述べてきました。今回述べたことの中には、私がかかり想像を逞しくして考えたことも含まれています。本来であれば適切な調査や研究を経て述べるべきですが、今回は実体験をもとに、「私なりに」考えたことをあえて思い切って述べてみました。

最後に、安土城跡は現在でも高石垣などが残っており、現地に行けば当時の姿に思いを馳せることができます。そして、現在でも全国各地から多くの人々が訪れる特別な場所であり、また市民や県民にとっての誇りとなる場所であり続けています。今年は築城開始から450年の節目ということで、安土城跡に関わるイベントも多く予定されています。当時の人々の安土城に対する特別な思いが、現在にも受け継がれています。

参考文献：

- 松田篤2024「特別史跡安土城跡発掘調査—令和の大調査開始!—」『土の中から歴史が見える2023—最新の発掘調査成果から—』滋賀県埋蔵文化財センター pp.39-48
松田篤2025「令和6年度天主台周辺地区の発掘調査成果—発掘調査によって明らかになった伝本丸取付台—」『土の中から歴史が見える2024—最新の発掘調査成果から—』滋賀県埋蔵文化財センター pp.65-74

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは石川達葵さんです。

考 古学者の書棚

「住田正一蒐集古瓦図録」(A4版)

大川清 編／交通研究協会 (2006)

河野 一也

はじめに

住田正一氏(1893—1968)は海事史・法制史学者として知られますが、古瓦研究者としても活躍され、岡山の第六高等学校の学生時代から全国の寺院跡を踏査して蒐集された古瓦は、学術的にも貴重な資料です。

昭和9(1934)年に限定54部で刊行された住田正一編『国分寺古瓦拓本集』は、住田正一・平塚運一(版画家)・料治熊太(古美術研究科)により国分寺の代表的な文様瓦を手拓した実物を裏打ちし、手すき和紙に張り付けたもので、秋州道人(会津八一先生)の手書きの題箋を貼付した帙に収めたものでした。なお、住田氏の遺稿は内藤政恒氏との共著『古瓦』でした。

今回紹介する『住田正一蒐集古瓦図録』は、ご子息の住田正二氏の特段のご高配で、その後、半世紀以上の時をかけて蒐集された国分寺と諸寺の古瓦を網羅したもので、瓦の断面図、拓本と写真で紹介したものです。



内容

[乾](コロタイプ写真 219葉)

諸国国分寺文様瓦 諸国古寺文様瓦 武蔵国分寺文字瓦
諸国古寺文字瓦 諸国国分寺文字瓦

[坤](拓本類)壹、貳、参、肆、伍

(コロタイプ仕上・線装本仕立)5冊・索引1冊

壹 諸国国分寺文様瓦(鏡、宇瓦)

貳 諸国古寺文様瓦(鏡、宇瓦)

飛鳥寺 法隆寺 川原寺 薬師寺 橘寺 岡寺
久米寺 太平寺 和泉寺 大野寺 報恩寺 神呪寺
鷲林寺 平安宮大極殿 平安宮内裏 日吉廃寺
寺本廃寺 宗元寺 永福寺 頼朝屋敷 鶴岡八幡宮
影向寺 勝呂廃寺 城戸野廃寺 五明廃寺
小用廃寺 南比企窠跡群 入間郡十社明神 崇徳寺
高麗寺 慈光寺 萩日吉神社 青鳥城 喜多院
九十九坊廃寺 龍角寺 千葉寺 結城廃寺 瓦塚瓦窯
三村山清冷院極楽寺 雪野寺 善光寺 山王廃寺
金井廃寺 下野薬師寺 借宿廃寺 多賀城廃寺
四王寺廃寺 太寺廃寺 赤洞神社 長坂遺跡
須恵廃寺 栢寺廃寺 寺町廃寺 福山城 前田遺跡
千軒廃寺 内代廃寺 来住廃寺 石手寺 麻生田廃寺
上野町廃寺 中ノ子廃寺 朝美廃寺 湯之町廃寺
繁多寺 都府楼 福岡城 怡土城 虚空蔵寺
弥勒寺 鞠智寺

参 武蔵国分寺文字瓦

郡名押印瓦 郡名へら書文字瓦

肆 武蔵国分寺文字瓦

郡名叩き具文字瓦 郡名へら書・押印磚

郷名へら書文字・押印・叩き具文字瓦 人名へら書文字瓦

范文字 摸骨文字 指書文字 爾余の押印瓦 爾余のへら書文字瓦

伍 諸国古寺文字瓦

下総国 龍角寺 人名(氏族)へら書文字瓦

陸奥国 多賀城 押印瓦

下野国 薬師寺 叩き具文字瓦 河内郡衙跡 へら書文字瓦

和泉国 大野寺 人名へら書文字瓦

筑前国 都府楼 叩き具文字瓦

常陸国 三村山清冷院極楽寺 叩き具文字瓦

諸国国分寺文字瓦

山背国分寺 押印瓦

佐渡国分寺 へら書文字瓦

下総国分寺 人名へら書文字瓦

上野国分寺 へら書文字瓦

下野国分寺 へら書文字瓦 押印瓦 叩き具文字瓦

おわりに

現在、これらの古瓦などは国分寺市に寄託され一部展示されています。また、武蔵国分寺資料館では特別企画展「住田古瓦コレクションの世界一瓦に魅せられて」(2009)、旧新橋停車場鉄道歴史展示室の企画展「国分寺物語 諸国国分寺を巡る



旅一住田コレクションを中心として」(2013)「古代文字瓦の世界一住田コレクションを中心として」(2019)でも紹介されました。

また、古瓦を研究する若い研究者を支援したいという住田正二氏の想いから、交通研究協会(理事長 住田親治)の委託を受けてできた「住田古瓦・考古学研究支援委員会」は、古瓦研究の次世代を担う研究者の育成を図ることを目的として、ご子息住田親治氏に受け継がれ、毎年、古瓦研究などに関する優れた業績に対して奨励賞を授与しており、結成から15年目を迎えます。

アルカ通信 No.274

発行日 2026年7月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp